

開催地名：大阪府泉大津市	
開催日時	令和元年 12 月 11 日（水） 14：00 ～ 15：30
開催場所	テクスピア大阪
語り部	吉田 亮一 （宮城県仙台市）
参加者	一般市民 約 150 名
開催経緯	本市では、近年大きな災害が起こっていないため、防災活動をはじめ地域活動に参加している人が少なく、地域連携が低いと言える。また、市民（特に若年層）の災害に対する防災意識が低いと感じている。さらに、災害に対する備え（備蓄を含む）が少ないと認識しており、災害に対する意識の改善の一助とするために本講演会を企画した。
内容	（１）防災の基本とは これは立場や役割とは関係なく、自助、共助、公助とすべての人に関係している。「心配ない」、「ありえない」、「大丈夫」、「まさかと思う」といった言葉は、人間だけが思うことである。防災は危機感と想定以上の備えは基本である。すべての責任者は最大の危機感と想定以上の備えで命を守ることを是非お願いしたい。 （２）地震から身を守るために 大地震はいつ起こるか分からない。小学生であれば下校時ということも考えられる。「揺れから身を守るためにランドセルを頭にのせる」と答える児童が多いが、それだけでは足りない。たとえば、ブロック塀は道路側に倒れるようにできている。頭だけでなく、背中もガードしないとイケない。下校時に地震に遭遇したら、後ろに手を回してランドセルの金具をはずし、肩の方からふただけを頭にかぶせる。そして、体操座りをすることで全身を守ることができる。また、寝ているときに地震が発生したら、“ダンゴムシ”になることだ。立ってうろうろせず、布団をかぶって丸くなる。枕元には、靴下、スニーカー、ヘッドライト、防犯ブザー、イヤホン付き携帯ラジオ、雨用カッパの 6 点セットを入れた防災袋を日頃から置いておくと良い。 （３）避難所での生活 私の地元、茂庭台 5 丁目では、全世帯が 5 日間停電し、ガスは 3 ～ 4 週間、水道は 2 週間止まった。指定避難所の茂庭台中学校で、17 日間避難所が開設され、最大時は 200 名の方々が避難していた。私は震災時、17 日間指定避難所の責任者を務めた。その体験から提案したいことがある。それは、避難所で小・中学生

	に一定の役割を担ってもらうことである。そのためには、普段から防災訓練に彼らに参加させることが必要である。 東日本大震災が起こったとき、地域には高齢者と小・中学生しかいなかった。しかし、避難所はすぐに開設しなければいけない。避難所でも、会社員や高校生は早朝から通勤・登校してしまう。運営には彼らの力が必要であった。避難所で、小・中学生は大活躍してくれた。震災当日、私が一時避難場所にいると、中学生が走ってきて、「避難所の準備ができたので避難してきてください。」と伝えてくれた。避難所に移動すると、中学生が自らのアイディアで避難所の床に柔道用の畳やマットを一面に敷いて、私たちを迎えてくれた。その後、避難所内では必要事項の掲示やごみの分別など、小・中学生が自発的にアイディアを生かして行ってくれた。毎朝、避難所を掃除してくれたのも小学生である。 自衛隊の救援物資が届いたときも彼らは率先して動いてくれた。自衛隊は、その場に物資を下ろすだけで運んでくれない。中学生が救援物資を運び、きちんと種類別に重ね、台帳に記入してくれた。水の配達にも彼らは活躍してくれた。小学生がプールの水をバケツで汲んでポリタンクの中に入れ、それを高校生と大学生がトイレ用の水としてマンションの上層階まで配達するのだ。エレベーターは停電で止まっているし、ポリタンクは1つ18～20キロある。マンションは、高いところでは30階もあり、上層階に高齢者が暮らしていた。 このような経験から、私は年少者への防災教育は非常に重要だと実感した。いざというとき、彼らは大きな役割を担ってくれる。防災訓練の担当者をお願いしたいことは、地域の避難訓練や避難所設営訓練に是非児童・生徒を加え、受付や設営、炊き出しなどを体験させてほしいということである。
開催地より	被災経験者から震災当時の様子を聴く機会は非常に貴重なもので、受講者は真剣な様子だった。参加者の防災意識は確実に高まったので、地域防災力の向上につなげていきたいと思う。